

美和ダム再開発湖内堆砂対策施設モニタリング委員会（第7回）

議事要旨

日 時：令和2年5月29日（金） 15:00～17:00

場 所：WEB会議

【議事】

1. 議事

- 1) 第6回委員会での指摘事項
- 2) 令和元年度のモニタリング調査結果
- 3) モニタリング調査計画
- 4) その他

2. 今後の予定

【議事要旨】

1. 第6回委員会での指摘事項について

- 事務局説明 ■ 第6回の指摘事項について説明
主な意見等 ● 委員全員が了承

2. 令和元年度のモニタリング調査結果

- 事務局説明 ■ 令和元年度に実施したモニタリング調査結果について説明
主な意見等 ● St1のみ粒度が粗くなっているため注視すること。支川である藤沢川の合流前の地点であること、例えば水際からドライな場所へ変わった等も要因と考えられる
- 令和元年10月洪水は河床がかなり動いており、これは貴重な経験で、簡単なものでいいのでできれば早期に測量を実施した方がよい。来年度だと他の要因も入ってくる。縦断形が分かるとよい。航空写真から高さを測れないか確認すること。
 - 天竜川流量についても整理すること
 - 陸域において裸地が増加しているため河原性生物が増えていると考えられるので、陸域環境を踏査レベルでよいので把握しておくことが望ましい
 - 三峰川では流量とともに濁度が大きな要因であるため、調査日の整理においては流量と濁度を併記すること
 - 下流河川では濁度の連続データの重要性が高い。設置位置、設置方法について

て工夫すること。予備の機器を用意し、流出した場合洪水直後に再設置することも有効と考えられる

- 採水の粒度分析は、全体の採水状況から、全地点で採水しているタイミングで実施すること。バイパストネルのデータが無いことは重大なロスである。どれを分析するかは、委員に相談してもらって構わない。
- 洪水時には高遠ダムだけでなく、美和ダムでもダム貯水池内の土砂が巻き上げられる可能性がある。
- 底生動物について、三峰川と天竜川で掘潜型と匍匐型の変動傾向が異なっており、興味深い。今後、大きな出水後の底生動物の種構成の回復が見られると考えられるので、今年度も同様に調査を実施していくこと
- 魚類は、三峰川では出水後に回復していない。出水後の各分類群の回復の過程について、付着藻類、底生動物、魚類の順で現存量・個体数が回復するものと考えられる。最終的な目的を考えながら整理すること
- 自然攪乱からの回復過程を追跡することが重要。当面は河床が動きやすくなっていると考えられる。総合土砂管理を含めて流砂系の回復という視点でも重要な事象である
- BP 供用後の環境を評価するにあたり、日本全体で自然攪乱が減少する傾向にある中で、自然状態に近い環境を創出したことは重要とみるべきである
- 魚類にとっては水深の変化が重要であるため、瀬淵構造の変化の把握も重要である

3. モニタリング計画

事務局説明 ■ 令和2年度以降の施設モニタリング調査及び環境モニタリング調査の計画について説明

主な意見等 ● 植生調査は令和3年度でもよいが、今年度踏査で確認しておいた方がよい。

4. その他

事務局説明 ■ 大規模洪水時による湖内堆砂対策施設への影響、ダム流入地点の濁度計測について、洪水初期の土砂バイパス運用効果について説明した。

主な意見等 ● 洪水初期に土砂バイパスを運用することの効果を確認できた。降雨予測などを踏まえ、容量の回復が見込める場合には、初期より土砂バイパス運用することを検討して欲しい

以上